【講演と対話】

「教育と研究における主体性について
――当事者としての現実感覚を手がかりに」

講演者：坂口　智
対話者：新妻　千紘
司　会：戸田　功

戸田：司会をさせていただきます戸田です。「講演と対話」というのは通常の講演と違って、対話者の側からテーマを指定した上でお話してもらうので、対話者という役割が結構重要になってきます。対話者は新妻千紘さんにお願いしています。新妻さんは東京学芸大学連合学校の博士課程の２年生で、現在教育学を研究しており博士論文に取り組んでいる所です。新妻さんの研究テーマとの関連も深いので、対話者をやっていただくことにしました。講演をしていただく坂口先生ですが、私とは20年以上前に新座中学で実習生の研究授業を指導に行ったところで出会いまして、その次の年から埼玉大学の現職の大学院生として入学され修士論文を完成させて現場に戻られたという方です。それ以来長い間お付き合いがあります。坂口先生は、一言で言うと、「座敷わらし」のような感じの方です。坂口先生の行く学校は、いつの間にか良い場所になってしまう、そして、いなくなるといつの間にか傾いてしまう、そういうことがたびたびあるのですが、私としてはなぜそうなのかということが気になっています。埼玉大学の学生も坂口先生のところで勉強させていただくとなぜか同じように「座敷わらし性」のようなものを身につけて帰ってくる。その秘密を聞き出してもらいたいと思って、新妻さんに企画に参加してもらうことにしたというわけです。

今回は、その「座敷わらし性」に光が当てられるようなテーマを新妻さんに設定してもらった上で、坂口先生にお話をして頂きます。大学の１コマの授業と比較しても、今回の企画の時間は短いのでテーマを絞ったほうが良いということもあります。私は司会なので、最初と最後に少し出番があるかなと思っていますが、新妻さん準備はよろしいでしょうか。

新妻：はい。大丈夫です。

戸田：はい。では、ここからは新妻さんと坂口先生にお任せしたいと思います。

新妻：本日はよろしくお願いいたします。まず、今回のテーマである「教育と研究における主体性について――当事者としての現実感覚を手がかりに」というタイトルについて、なぜこのようなテーマを設定したのかということをお話してみたいと思います。まず、最初に目につくのが主体性というタームなんですけど、主体性という言葉は先生を目指す人や教育現場にいる人であれば、必ず、使う言葉、最も重要視される言葉であると思います。子どもにいかに主体性を身につけさせるかということがいかに重要かという問題は誰を相手にしても共有することができる。一方で、では主体性とはなんだろうという問いは意外と論じられてないのではないか、と考えています。主体性というのは簡単に言うと、自ら判断し決定することと定義できると思うのですが、それを私たちがどれほどちゃんとやれているかということはきちんと自覚されていないのではないかと考えています。ここは教育学部なので学校現場のことが主に話題になるとは思うのですが、今日学会には教育現場の方に限らず、一般会員の皆様もいるので、その方たちにとってもそれは自分の問題であると感じられるような展開になって欲しいです。例えば、今流行りのツイッターやインスタグラム、あるいは、テレビといったメディアは、数が一番力を持つ場であって、いいねがたくさんつくもの、人から多くの共感を得られるものといったような、多数決で勝つことができる情報ほど広く発信されるという傾向があります。しかし、自ら考えて判断した正しさと、多数決で正しいとされることは必ずしも一致しない場合があるし、それらがきちんと区別されていない時の判断の適切さが問われるのではないかと考えています。その問題を私が強く感じたのは埼玉大学で行っている国語教育基礎研究Ｂという授業に私が参加したときです。何かと言うと、学生たちに自分たちが教師を目指すうえで不安に思うこと、疑問に感じることは何ですかと投げかけたんですね。そのときに、ほとんどの学生は、自分は子供たちの期待に応えることができるのか、あるいは、学校の校長先生や指導主事、保護者からいろいろな期待や要求に対して応じることができるのか心配だということを挙げました。これは非常に根深い問題であると私は感じていて、教師と言うのは自ら発信していかなければならない立場で、子どもにどういう大人になって欲しいかということを常に伝え続けなければならないはずなのに、そういった立場を目指す学生たちが、自分が子供たちに対してどう向き合っていくかという問題の当事者であると認識していないということがとても衝撃でした。現場の先生方であれば、そのような状況が容易に学級崩壊を導くだろうということは感覚として理解していただけるのではないでしょうか。子どもは善悪の判断や自分がどうすべきか迷ったときに、まず先生に頼るわけです。でも、先生がそういった問題に取り組んでくれないとなれば、大人に対する信用が簡単に失われてしまうので、学級の統率がすぐにでも取れなくなってしまう。だから、これは非常に深刻な問題であると思っていて、誰もが自分は問題に取り組んでいる当事者である

と感じられるためにはどうすればよいのかということが、ここ数か月、私や戸田先生や山本先生など、埼玉大学の先生と取り組んできた問題の一つです。

今日は、学校の校長先生である坂口先生にお越しいただいているのですが、先ほど戸田先生が「座敷わらし」というとてもおもしろい表現を使っていました。「座敷わらし」とは、いるとなんとなく物事が良くなっていく状態を生んでくれるものだと思うのですが、それは逆もあるわけで、その人がいるだけでどんどん状況が悪くなるような場合も考えられますよね。坂口先生が一、二年ほど前に私や戸田先生に話されたところによると、赴任先の小学校がとてもひどい状態で、むしろ、状況を悪化させるような要因ばかりだったという。けれども、1年半たったあとに、とてもいい学校になったと嬉しそうに話されているのを聞いて、一番酷い状態から最善の状態に持ち直していく過程で、坂口先生がどういうことをなさったのかということを今日聞いてみたいと思っています。

坂口先生は、赴任した小学校がとても良くない状況だったとおっしゃっていたのを覚えているのですが、それはどのような状況でしたか。

坂口：はい。あまり関心がないというか、ただ仕事をこなしていればいい、というような。温かさよりも冷たい感じがした、というのが第一の印象ですかね。地域としては学校を応援するために多くの協力をしてくれていたんですけど、それにどちらかと言えば寄りかかっている先生が多い集団であるという印象がありました。

新妻：自分の仕事にしか取り組まないということは、どうして悪い状況であると感じるのですか

坂口：やはり、他人事というのかな。具体的に言うと、今年コロナの関係で教育実習の受け入れをどうしようかという時に、うちの学校に限らず、新座市は17校あるんですけど、予定通りゴールデンウィーク明けから実習を始めた学校はうちの学校だけでした。ほとんどの学校は、子どもがいなければ実習はできないという発想で、子どもが集まったら、現場が落ち着いたら受け入れを始めようとしていたんですね。うちの学校もそうでしたが、それが先ほど言っていたやけに冷たいな、という印象です。どこの学校でも、こういう状況だとできないっていう否定的な可能性ばかりを追究して、じゃあできないとしたらどうしたらいいのか考えないところが、冷たさを感じる大きな要因というのかな。そこに私自身は違和感を覚えました。

新妻：つまり、このコロナ禍で学生を受け入れるのはありえないしできないという考え方が坂口先生には冷たいと感じられたということですか。

坂口：そうですね。なぜ学生だけが受け入れられないのかという。毎日通勤している先生たちも同じでしょう。学生が学校に来れないのであれば先生方だって学校に来ては行けないことに

なるはずで、そのような状況で受け入れを断るのはとても冷たいと感じられる、そういう感覚です。

新妻：そうですよね。実習に行きたいけれど行くことのできない学生は年内に教員免許を取得できない可能性があるわけですよね。ですから、坂口先生の小学校で実習ができなければ、一年待たないといけないというかなり大変な状況に学生はいるけれども、学校としてはそういう学生への配慮よりも先に、子どもがいなければ実習はできないし、そもそも、そんなリスクを抱える必要はないという判断を学校はしたということですよね。

坂口：各学校そういう観点でやっていました。うちは逆に、子どもがいない状況で学生を受け入れてみたんです。学生は7月には採用試験があるし、他の実習もあるということが大学側から説明されていたので、これ以上苦しい状態に学生を追い込むよりは良い。通常、実習生と先生は一対一で実習を行うんですけど、うちの学校は二クラス併合なので、二人の先生が一人の実習生を持つことにして、2年生から5年生の四学年で四人の学生を受け入れました。子どもがいないんだから先生たちはいつもより時間に余裕があるはずなんですよね。だとすると学生の指導に専念ができるだろうし、そういう先生たちは普段子供がいたら実習生の指導どころじゃないってぼやいています。子どもがいないから学生を受け入れないというのは、いつもの言い訳とは正反対なんです。子どもがいない状態で学生を受け入れて、なおかつ学生一人に先生を二人つけられるんだから、家の事情で先生の一人が早く帰らなきゃいけない時ももう一人がカバーできるし、普段はありえないけど学生は一度模擬授業に失敗したら次の日違うクラスで再挑戦するというようなこともできる。そもそも、通常であれば学生は模擬授業を先生に見てもらうなんてことはできないんですけど、結構時間を持て余していた先生たちが協力して学生の指導をしてくれて、かなり充実した実習になりました。先生たちも模擬授業に参加することで考えさせられる場面がたくさんあったり、学ぶべきなのは実習生だけではなかったなんて後で感想を言ってくれていたり。やってみると大変だったというよりは生み出すものが多かったので、随分収穫がある形でできたというのが実感としてあります。

新妻：今日の企画のタイトルには現実感覚という言葉があるんですけど、現実感覚とは適切な判断、ふさわしい判断をするのに不可欠なのではないかという仮説のもとに選んだ言葉でした。コロナ禍で、しかも子どもがいない状況で教育実習生を受け入れるのはあり得ないという現実感覚を持っている人が大勢いた一方で、坂口先生は実習を必要とする学生がいるのであれば受け入れるべきだし、実はむしろ子供たちがいない方が質の高い実習ができるかもしれないという判断をすることができたというのが坂口先生の現実感覚と言えそうですね。

坂口：そうですね。今後も二人体制で実習生を受け持つことは

やっていこうと思いますし、それを市内の学校にも広められたらいいなと考えています。大学側もそれに関しては、試験的な実践だったということを考慮してもやってみる価値のある取り組みだと捉えて他市にも紹介してくれるという話だったので、先生方の負担軽減という観点においてもこれは有効な手立てであったと考えています。

新妻：問題や負担って避けたいものですし面倒くさいですよね。つまり、わざわざ取り組む必要のない問題に坂口先生は可能だと考えてあえて取り組んでみたときに、当初の想定とは全く正反対の結果が生み出されているのが非常に面白いなというように思います。本来であれば絶対に避けたいというような問題に取り組んだ結果、得られた成果がむしろ大きくなる、このような、厳しい状況において新しい発見であるとか新たな進展が多く生み出されていったというところに注目したいですね。

戸田：そういえば、受け入れた実習生は教員志望ではなかったそうでしたね。他にもわけありで他では受け入れを断られた学生がいたというのも小耳にはさんだのですが。

坂口：四人受け入れたんですけど、みんな子供に関わる仕事につきたいという希望はありましたが、教員採用試験は4人とも受けないということでした。そういうことを聞くととんでもないと普通は言うところですが、うちの学校の職員23人のうち5人は転職組なんですね。一般企業とか農協の職員だとか融資の資格を持っていたりだとかいろんな職業を経由して教職に戻ってくる人達のことを考えたら、違う仕事についていても戻ってくる確率が非常に高いのが教職であると言えるかもしれない。しかも、転職した人の中でも教職を選んだ人は結構馴染みやすいんじゃないかという話を先生たちに伝えました。身近にそういう人がいますからね。その通りなんだから、学生にできるだけ良い体験をさせて、後になって、5年か10年かはわからないけれど、もう一度ここに戻ってこようかなって思わせるように指導してくれって。そうすると転職組の人たちは納得して一番反応よくやってくれて、それに影響されて他の人たちも活気づく。他の先生たちの前職は普通知らないものですが、それを明るみにしたことで、結構そういうことが想定できるんだという理解が得られました。

　他の市で追い出された学生というのは四人の内二人いるんですけど、そういう事情を抱えている学生もいますって伝えた上で受け持ってもらいましたが、最後実習を終えたらその二人も大学の指導教員にあの小学校に行って良かったと思いますと言っていたと大学の先生から報告を受けました。今日は当事者性というのもテーマにありますが、学生を受け入れる先生たちが当事者意識を持って学生に関わることで、学生たちはずいぶん変わりました。また、関わった先生たち自身も変わっていったということが現実にあったと言えると思います。

新妻：普通教育実習では、自分は将来先生になりたいと思いませんとか、なるか迷っていますということは絶対に言ってはい

けないというように学生の時は教わりました。坂口先生は教員を目指すつもりがないという学生に対しては、嫌な気持ちは感じませんでしたか。

坂口：うん。そんなふうに勉強したくないとかこの勉強をして何になるんだと言う子供を相手にして、それをなんとかするのが我々の仕事なので、そういうふうに考えている学生に対しても同じはず、つまり子供も大人も変わらないということです。やはりどんな問題でもどちらかと言えば否定的に捉える傾向が強いですよね。

昨日の午後、財政難の新座市で給食のお箸にかかる何百万円ものお金を削減しようということで、マイ箸を実施する提案をリモート会議で栄養士さんが行っていました。栄養士さんは校長室を借りて行っていたのでそれを聴きながら仕事をしていたんですが、栄養士さんの大多数は、やる前から家庭に問題がある家がこんなに多い中でどうやってマイ箸を実施していくのかと言って、猛反対をしていました。だけど、うちの学校ではコロナ対策ですでにマイ箸を子供に持ってこさせていて、家庭的に色々な問題を抱えている子は多いですけど全然問題は生じていません。お箸が汚いまま食べたいと思う子供なんていないんだから洗うのも持って来させるのも自分でやらせればいいじゃないって言いました。最初からは無理かもしれないけど、中学生になっても家の親が子どもの箸を洗って用意する必要があるのか、自分でできるでしょうって。なんで子どもに指導しようと考えないのかな。小学生だって中学年以上だったら自分のお箸が汚いまま食べようとは普通だったら考えないでしょう。やる前から家庭のせいにしてやるつもりがなくて、調理員さんの仕事を軽減してあげようという視点には絶対ならない。当然うちの学校でも忘れてくる子もいますが、毎日なんていう子はほとんどいません。忘れた子用には貸し出し用のお箸はちゃんと用意してあります。実際にやってみれば障害はないので、やはり否定的に考えることから始めている、チャレンジすることをしない、という傾向があると言えるでしょう。先生たちは子どもの主体性のことは口やかましく言っているのにも関わらず全然主体的でない。言っていることとやっていることが違うという姿勢に対して私は疑問を持っていて、まずはやってみよう、主体的に動いてみようということを先生に伝えています。その中で駄目な時もあるけれど、その時になぜ駄目だったのかということをなぜ考えないのか、やる前からもう駄目だと判断してしまう。そこに疑問を持ってまずはやってみよう、やって駄目だったら修正をしようって。失敗することは当然あるというそこの部分は共感してあげるんです。だけど何もしないうちにただ否定するのは、主体的に動けって教える立場にある我々がやることじゃないじゃないという話をすることによって先生を動かし始めたって言うのが現状ですね。

新妻：今日取り上げたかった主体性という話題に坂口先生のおかげで踏み込めたようです。その小学校に赴任したばかりの時には自分の仕事にしか関心がない、それで、外から降ってきた仕事については自分の仕事ではないし面倒くさいと感じる「主

体的でない」先生がほとんどだったわけですよね。坂口先生が動き始めたことでそういう先生たちの意識はどんなふうに変わりましたか？

坂口：やってみると意外と楽しかったって先生たちは言っています。例えば、教育実習は孤独感や責任に苛まれたり、実習生によってクラスの授業進度が左右されたりする負担があったんですが、二人一組で実習生を見るようにしたら、自分だけやらされているという負担感がなくなって意外と面白くなっちゃったみたいです。先生二人で実習生を一人見るように提案したあとは私ほとんど指示を出してないんです。自分たちで勝手にいろいろやってみて、そのやり方を隣で見ていた他の先生が面白そうだからってそれを真似していくというように。まるで子供たちを見ているかのように先生たちは楽しんでやっていた。実習生も職員室には何度も足を運ぶようになって、実習生も楽しそうだったからそれを見ている先生たちも余計に楽しくなっちゃって。本当に動き出したらそばで私は眺めているだけでしたので、動き始めると全く違う景色が見えてきたというのが現状です。

新妻：実際、坂口先生は先生たちに提案をしたり話をするだけってことはないですよね。坂口先生自身はどんなふうに動くんですか。

坂口：どんなふうにって、まずは肯定的にものを言って否定的に言わないようにする。いろいろあるかもしれないけど、まずはちょっとやってみないっていうように。先生たちはそれに慣れてくると声かけるだけで、なんかじゃあ工夫してやってみるかという気になってくる。自分から動くことが苦にならなくなってくるっていうんですかね。そして、それを私自身がやって見せているということですかね。見えないところで動かない。見えるところで動くようにしている。それを先生たちに見せることで変化をさせる。

新妻：見えるところというのは具体的にどういうことですか。

坂口：教室の蛍光灯が切れているって言われたらすぐに、放課後じゃなくてすぐに、授業中でも直すってことですね。ゴミが落ちていれば後で拾うんじゃなくて今拾う。教室訪問をして、先生のクラス汚いですよって絶対に言わない。授業をやっている側からゴミを拾って歩いてゴミ箱に入れる。先生もまずいって顔しますけれど、子どもたちもまずいって顔しますね。それが気になる人なんだっていうふうに思わせるというんですかね。子どもたちは、校長先生は掃除が好きなんですか、とか、すぐに直すことが好きなんですかって言いに来ます。一番びっくりしたのは、校長先生になる前は大工さんだったんですかって言われたときです。大人ならそういうふうに思うはずかないんだけど、それを連想させるようなことを私が子どもに見せていたんだなって。要するに、いつの間にかいろいろなことが直っているというのではなくて、できるだけ誰かが見ているときに

そういうことをすると良い。この間も家庭科室の机の下の扉が壊れちゃって、家庭科室で女性の先生が必死にそれを直している姿を子どもが見ていて、先生それ校長先生に行った方が早く直りますよって一言言われたそうです。先生はその足で職員室に戻ってきて、校長先生すみませんが机の扉が壊れちゃって、先生が直すより校長先生のほうがいいよって子どもたちにアドバイスをもらったので来ましたって正直に言いに来て、それもすぐにその日のうちに直して翌朝担任の先生に伝えました。当然その先生には子どもにありがとうって言ってくれって伝えました。そうすると先生と子どもの関係も良くなるわけですよね。子どもがアドバイスをして、それを聞いた先生がすぐに校長に言った、校長はそれを聞いてすぐに直したという成功体験をそれぞれが実感することによってお互いの関係も良くなっていく。ありがとうって言われたらそれをまた真似してそういうことを先生に伝えようっていう子どもがまた出てくるわけですよね。一年生でさえも校庭の逆上がり練習機のネジが取れちゃっているというのを伝えにわざわざ職員室に私を訪ねてきて、そのとき私はいなかったんですけれど教頭先生がそのことを報告してくれてすぐに直しました。どんなところからも関係が生まれて、その関係がいいように回転していき、それを見ている人がまた真似をする、自分もそういうふうにありたいと思ってそれが広がっていくことがあらゆる関係の良さにつながっていくと考えて、こんなふうに私自身は取り組んでいます。

新妻：私はこのタイトルを掲げたときに、学校を再生した立派な校長先生が何か劇的に素晴らしいプランや理論のもとに画期的な教育がなされていくというようなことを想像していたような気がします。ですが、坂口先生のお話は、ゴミを拾うとか壊れていたら直すとかお願いされたときにすぐ答えるというような、とても些細に思えるちょっとした仕草が、学校全体に良い関係や状況を生み出していくことにつながっていくということでした。今日扱いたかったテーマに現実感覚があるんですけれど、汚かったらきれいにしたほうがいいとか壊れていたら直したほうがいい、間違っていたら正したほうがいいという意識は、理論やプランなんかと比べると遥かに現実に近いですよね。そして、その一番現実に近い部分というのは普通軽んじられやすいと言えると思います。そんなことは誰にでも思いつくことだとか当たり前だとか、誰にでもできることに過ぎないと思われがちなんですけど、坂口先生のやっていることは、そういう一つ一つの現実と密接につながった小さな判断の積み重ねが何をもたらすかということを明確に、自覚的に認識できていて、それは当事者意識の最たるものだと思いました。子どもたちや一緒に働いている同僚の先生たちの主体性の芽ばえがゴミ拾いから始まるとは普通思わないじゃないですか。でも何か自分で取り組んだときに良い結果が生まれたという小さな積み重ねが、大きな問題を解決する、自分こそが問題を解決できる主体であるという意識を生み出す最初の一歩として位置付けることができるんだということがわかりました。

坂口：身近にそういったことはたくさん転がっているはずなの

に、それが自分のことだとはなかなか意識できないということはよくありますね。私が放課後職員室のゴミを集めていると、用務員さん今日はいないんですかって言われることが何回かありました。校長室のゴミを集めて捨てようと思ったらゴミ箱がいっぱいで、いつも用務員さんにやらせるのは申し訳ないからって。用務員さんの時間も限られていて、しかもそれを使っているのは自分たちなんだから、それを人に集めてもらうというのはどうなんだろうと。

私が教員になって四年目の時に、事務の女性職員さんが、チョークがないって言いにきた男の先生の言い方に、あんたたちが使っているんでしょう！ってすごく怒ったことがあってとても衝撃を受けました。それから、自分たちで使っているものは自分たちでなんとかしようと思って、四年目になって初めて毎日チョークが置いてある場所を自分自身でチェックしたり、当時印刷に使っていた藁半紙六締めが入った箱を、結構重いけど一階の事務用品室から二階の職員室の印刷機まで運んだりするのを、とにかく毎日自分一人でやることを心がけました。まだまだ駆け出しで学校で自分が一番年下というのもありましたが、その学校にいた十年間は続けてやりました。そうしているうちに、坂口さんのようにはできないけど二締めだけだったら、というような女性の先生が徐々に増えていったという若いときの経験が学校を異動した後も自分の行動に影響していると感じます。

だから、なんで俺が校長なのにそんなことしなきゃいけないんだって苦に思ったことは一回もありません。やはり仕事柄、人に頼むってことは結構あるんですよね、そうすると自分が一方的に頼んでばかりというのも申し訳なく思って、自分が代わりにやれば用務員さんの仕事は軽減される、軽減できればちょっと仕事を頼みやすいというか。それは勝手な自分の気持ちなんですけど、そういう人に頼んだ仕事を断られるということはまずありません。それを見越してやっているわけじゃないけれど、どうしても誰かに頼まないといけないときの相手の立場を想像すると、自分ができるときにできることをしてあげたい、お互い様なんだからというようなことを意識している。持ちつ持たれつの関係をいかに作っていくかということが一番自分の根底にあっていろんなところにいい影響を与えている、言われてみて分析してみると私のやっていることはこんな感じですね。

新妻：学校をよくするために、という問題意識だととても自分にできるはずがないし自分が動くことで何かが変わるとは思いづらいですよね。けれども坂口先生の言っている「お互い様の関係」というのは、問題をみんなで共有するための最初の一段階であると思いました。テクニックではなく、何か解決しなければならない問題が目の前にあった時にお願いしたり、逆にお願いされたりという立場に置かれた双方が同時に当事者になりますよね。共に問題を解決するという意識がそこに生まれることを坂口先生は意図していると言えますね。そして、お互い様の関係はそこからさらに繋がっていく。

坂口先生に助けてもらった家庭科の先生は、今後坂口先生の

問題に対して自分はどう関わることができるだろうという課題が意識していなくても生まれているはずです。加えて子供たちも、普段は助けてもらう立場である自分たちが先生の問題を解決したという経験によって、自分の行動は良い結果をもたらすことができるという確信を得ることができる。

戸田先生は、今まで話してきた内容は教育と研究というテーマにどのように繋げていくことができるとお考えでしょうか。

戸田：今どうやって繋げようかと考えていたところです。

まず、教育と研究における主体性を考えた時に共通するのは、問題を認識して問いを立てることから始まる点であると言えます。坂口先生は「お互い様の関係」を通じて同じ問題を共有するという形で問いを提案していく、そのような問いを立てることが非常に上手いと思いました。共有する問題が自然発生しているかのように仕掛けている、仕掛けていると言うと変かもしれませんが、問題を自然と共有できるように動いている。その動き方というのは、言っているのにやらないということがなくて、言うからにはやる。まずやってみて、駄目だったら修正するという行為を自ら率先してやっている。失敗するのもお互い様で、まずやってみる姿を見せることから始まるという姿勢がとても主体的なんですよね。このように、問題を認識するという行為は主体性が不可欠であるという部分が研究と共通するところとしてあると思いました。

それに当事者性とか現実感覚がどう関わってくるかというと、やはり問題を理解したり共有したりするときに当事者意識が生まれる。さらに、失敗を通じてやり方を修正するときに現実と問題を結びつける感覚、すなわち現実感覚が関与してくるのだろうと思います。新妻さんどうでしょうか。

新妻：確かに、問いを立てるというのは最初の一歩だと思います。惜しいことに坂口先生のお話は、人によってはすごく当たり前のことを話しているという印象を与えてしまうんですよね。けれども、坂口先生がこれは問題であると感じるからこそ誰もが問題とその解決策を見出すことができるようになるのであって、問いを立てる以前の状態の時には、普通であれば問題を見つけることすらできないというのが本当だと思うんです。だから、ある状況に対してどのような問いを立てるかということが、非常に重要な問題で、あらゆる創造や発見のスタートになりうる。研究もそうですよね。

戸田：やはり、そうですね。違うという感覚や厄介で難しいという感覚、あるいは、これは何故なんだろうというところから研究は出発します。おそらく教育の問題も、これは一番厄介だとか嫌だな、困ったなというところから出発するんじゃないでしょうか、坂口先生。

坂口：うーん

戸田：そこにまず取り組むということだと思うんですけれど。

坂口：厄介だと思うことを否定的に捉えて、やる前から問題をなかったことにしようというのがあまりにも多いですね。さっき話題に出した、マイ箸を子どもに持たせるというのも、家庭の事情を考えるとできないという意見が大多数でしたが、何を根拠に全部家庭のせいにするのか私にはよくわからない。ただ23校集まった栄養士さんの中に、食中毒になったとしてもちゃんと洗っていないその子だけで、集団発生することはありませんよって指摘してくれた人が一人だけいたんですけどスルーされちゃいました。うちの学校の栄養士さんも入れれば二人ですけど、うちでは全然問題が生じていないのに他の人たちはなんでそんなに怒っているんですかねって話をして、うちはそのままでいいからうちの学校で余ったお箸をマイ箸をやらない他の学校に分けてあげればいいとは思うけど、やれる学校はやればいいのになって。23校が一律に変える提案をするからそういう反対が生まれるのであって、できる学校から始めればやり方を変える学校は増えていくはずなのに、なんで一斉に変えようとするんだろうと考えてみると、提案自体が間違っていたかもしれない。現実感覚があまりにもないかなって。

戸田：提案があまりにも一律だってことですよね。できるところはやっていいとかできるところは実施を推奨するという形式を作れば上手くいくかもしれない。ただ、みんな一斉にやりたがるのは自分で判断したことにしたくないからですよね。でも本来であれば、自分で判断した方が非常に取り組み安いし修正もしやすいと思うのですが、何か判断を他人に預けたがるということがあるように思います。

坂口：責任を負いたくないというのが一番強いと思います。責任を負うくらいならやらない方が無難だということになる。でもそれは生み出すものがない、それではつまらないと私は感じます。教職は夢を持ってやれとか夢を持たせる仕事だとか言っておきながら、夢も何もない人たちの集まりが教えているなんてそれこそ子供がかわいそうです。なんでもやらせてみればいい。そういう感覚がどうもあるかな。

戸田：そうですね。やってみなければ、やるときにどこをどう押さえなければいけないのかという経験値を積むこともできませんね。坂口先生の場合だと、一番厄介な生徒ばかり集めて担当した時期があったじゃないですか。そのときに一番大変な子にまず配慮する。逃げないで向かっていくということがすごく大事で、そこを外すと崩壊が必然的というか、子どもに舐められてしまうし他の子たちも守れない、そういう話だったと思うんですけど、そういう経験をしているかどうかがとても大きい気がするんですよね。

坂口：それは大変な経験でしたね。本当に学校が荒れているときに、総合的な学習の時間に手のかかる子供たちをそれぞれ数名ずつ分散させて先生方が持ってみたら、大変な子たちはみんな逃げ出して先生たちで追いかけ回すようになってしまいました。良かれと思ってやったことでしたが結果的にそれは失敗

だった。だからいっそのことみんな集めちゃって私が見ることにしました。総合の時間は「人と環境」という大きなテーマだったので、学校中の壊れた椅子や机をきれいに直して再利用するという活動を手のかかる子供たちにやらせたんですね。机の横のフックが外れていないか点検させたり、椅子のボルトが一個ないとか机の天板のネジが外れているとか全部その子たちにチェックさせて、電動ドライバーを四、五台私のポケットマネーで購入させて使えるようにさせました。毎日散々壊していた子供たちが修理に駆けずり回って、最後は直した物に日付と自分の名前を書いていいことにしたら「これは俺らが直したんだから絶対壊すなよ」って周りの子供にも言って回って自分たちは全く壊さなくなったというのが今でも忘れられません。でも私はたくさん失敗しているんです。何か試しにやってみて駄目だったというのは数えきれない程あって、だからこそ他の学校で実習を断られた学生に対してもなぜそんな失敗をしてしまったかを自分で分析して同じ失敗を繰り返してしないように心がければいい、一回の失敗なんて大いに結構、落ち込む必要なしと言い切ることができます。

それは子供も大人も同じです。先生が子供を叱って校長室に連れてきたとき、私は怒ったり罰を与えたりしないで、どうして悪かったかわかるよね、だから何かいいことをして返してくれますかって子供に言います。先生にも、先生がやってもらって助かるようなことを子供にやらせてあげて、それをみんなの前で見せてほしいとお願いします。罰を受けるのをみんなに見られたらただ惨めになるだけだから、いいことをして挽回する機会を作ってあげるように話すんです。罰として給食のおかわりを禁止するなんていうのはなし、机の整理整頓をしてから帰るとか先生が手伝ってほしいことは色々あるでしょうって。そうすると子供はずいぶん変わる。失敗からどのように学ぶのかということが重要なんであって、子供はおろか先生たちも失敗を恐れると何もやらなくなってしまう。だけど、やってみる前からできないことや失敗を想定するのはおかしい、どうして一回やってみようと思わないのか、大人が行動を起こせないなら子供はますます身動きが取れなくなってしまう。この感覚をもっと先生たちにわかってもらいたいと考えて日々を送るのは楽しくてしょうがないです。だからいい学校に行きたいなんて思わない。

これ以上最悪なことはないというスタートは常に私が選びたい出発点で、みんなが敬遠する余り物のクラスをもらうのは大好きでしたね。そういうクラスが良くなって他の先生に羨ましがられた時なんか、このクラスは元々誰も持ちたくないって言ったクラスだったこと私は忘れませんよって冗談まじりに話すんです。先生たちはしまった、って顔をするんですけどその時の快感は格別ですね。

方法次第で状況はいくらでも変わるんです。そして、結果は自分だけで出したとは決して言いません。当然自分にも苦手な子供がいる。そういう時は他の先生に助けてもらって、他の先生に馬の合わない子供がいたら自分が助けるようにする。そういうお互い様の関係の中で失敗はあっても切り抜けてきた、だから結果的に失敗することが今の自分を作ってきたということ

ができると思います。

戸田：そうすると、さっき新妻さんがリクエストした教育と研究の共通性で言えば、やはり失敗する勇気というのが共に重要だということですね。研究も新しいことを発見しなければいけないので人と同じことを言ったりやったりするわけにはいかない。すると挑戦して色々と試行錯誤をするのは避けられない。また、発見したときやある種の創造が生まれたとき、問題を解決した時の面白さも非常によく似ています。

　ところで、責任という問題に関してですが、責任を負いたくないとか失敗したくないというのは優等生に共通するメンタリティですよね。できない人は、お前は駄目だという厳しい試練に常に晒されるわけですが、実はそういう人にこそリカバリーするチャンスや発見が多かったりします。発想を切り替えれば、誰もが同じに研究的・創造的な発見につながるチャンスを持っている。失敗こそチャンスというのは言い古されていますけどね。これこそ、失敗する勇気と言えます。責任にうるさい人は大抵自分が責任を取れない人だということが多いです。

　最後に一言というには長く喋ってしまいましたが、失敗という発想を変えてリカバリーの方法を模索する「失敗する勇気」が必要であること、そして、進んで責任を負うことでしか生まれない創造や発見の面白さが味わえるというのが研究と教育の共通する点である思いました。この問題は当事者性、主体性の問題とも重なるように思います。

新妻：その通りですね。責任は誰しも負いたくない、厄介ごとだと思いがちですが、坂口先生が行っている発想の読み替えというのは、責任とは義務を負うことではなく、逆に裁量権を得られるという前向きなあり方だと思いました。要するに、とてもいいクラスを持ってしまうと、この先もずっと良くしていくということが義務や強制のように感じられてしまう、けれども誰もが持ちたがらないクラスは、坂口先生がいかようにも良くしていくことができるという裁量権が得られる喜びがあるから、問題が面白く感じられるのだろうと思いました。椅子や机を壊し続けていた子供たちに物を直してそれを維持することに子供たちが喜びを感じられたのは、坂口先生が自分で責任を取るということの意味を身をもって教えたからだと言えます。そういった発想の転換のあり方は今日のテーマにとても合致しているというように思います。研究も自分で考えて判断するという裁量を自分でいかに負うかという問題として読み替えられるような気がします。

戸田：坂口先生は、直すことだけでなく壊す経験も子供にじっくりとたくさんやらせたと言っていましたね。

坂口：そうです。修理に必要な部品を取るために、普通はあり得ないんですけど、きっちりと丁寧に分解させました。壊すのは得意なんだから上手に壊しなさいと。いかにゴミを出さずにやるかということでもあるし、丁寧に時間をかけてやることが悪さをさせないための時間稼ぎだと思われても困る。実際に時

間稼ぎではあるけれども現実的に時間がかかるということは必要でしたね。

戸田：人と環境について考えるのに重要な経験ですよね。

坂口：子供たちは机椅子に限らず、壊れているところや曲がっているところ、今までとは違うところに目がいくようになりました。そうしたら、これはあなたが自分で発見したんだから班長になって修理にどのくらいの人数と時間が必要か考えなさいと言って、またその仲間内でグループを組ませるんですよ。いちいち見に行かないから今日中に終わるのか来週までかかるのか計算して、どんな部品が必要なのかメモを書いて提出しなさいと言って、その部品を次までにちゃんと箱に入れて用意しておいてあげる。そうするとまたそれが嬉しいんでしょうね。だから後になってそういう方面の職業についた子どもがいるんですよ。

戸田：面白くなったんですね。

坂口：その当時にはない言葉でしたが、キャリア教育につながった子もいたと言うことですね。

戸田：厄介事を引き受けたとみんなは考えているけれど、新妻さんの言葉を借りると、先生はそれを裁量としてどのように生かすことができるかというように発想を変えたと言うことですかね。

坂口：いい子を預かるよりも貰い手がないような子を扱った方が、気が楽なんですよね。確かに裁量権、なるほど、そういう言葉として言われてみると、本当に自由にやることができたと思います。

戸田：確かに、いいクラスをさらに良くしなければならないというよりは、どうしようもない状況をなんとかする方が踏ん切りがつけやすいという点で気が楽ですよね、現実を見てその状況をどう生かすかを考えるとき、裁量権を発揮しやすくなると私も思います。

坂口：このような発想が生まれたのは、私が高校一年生の時だと思います。県立学校に落ちて私立の学校に行ったんですけど、中間テストの結果が55人中53番でした。その時の担任の先生が的確に自分が努力できていない点を指摘してくれて、勉強もしていないのに目標を80点や90点にしているのは間違いじゃないか、君の目標は平均点を目指すことなんじゃないかと言ってくれました。勉強時間は例えば国語ならどれくらい取っているのか聞かれて、漢字しかやっていませんと答えたら当然点数は取れないに決まっている、目標は平均点、50点60点に下げて、テスト勉強は復習を中心に、授業中の態度は真面目に、提出物を忘れないように気をつけたら3は取れる。大学に行きたいなら普通の人は高校3年生で一年間勉強すればいいけど君の場合は

1年生から受験勉強を始めなさいと具体的に指摘してくれて、それを信じて続けていたら大学に進学もできたので、そういった発想を教えてくれた人がいたということですね。

戸田：それは、先ほどの言っていることとやっていることを一致させようということの原点であるとも言えますか。

坂口：原点ですね。不可能なことを目指すのではなく、可能なことをどのように実現させて、それが現実的に妥当であると思わせて、さらに、それを定着させる。その根本は、それをやってどうにかなるのかと思わずに素直に指摘を受け入れたことにあると思います。今の小学生たちにも人の言うことを斜に構えて見るんじゃなくて、言われたことを素直に受け入れて素直に実践する気持ちを持ってほしいです。

戸田：それでは、そろそろ時間なので、新妻さん一言まとめてもらっていいでしょうか。

新妻：はい。今日は先生方ありがとうございました。今回のタイトルは壮大なもの、つまり誰がどの立場においてもアクセスできるテーマとして想定していたんですが、今日ここでた結論は非常にシンプルなもので、当事者として自ら判断し決定するという主体性を行使するためには、本当に些細に見える小さな一歩から積み重ねていかないといけない。まずは、判断や決定の責任を自ら負うこと。あとは言行一致ですね、自分の言っていることと実際の行いを一致させるという小さな積み重ねが最終的に自ら判断して決定するという主体性につながっていくということが今日の話し合いで明らかになったように思います。

戸田：はい。ありがとうございます。ちょうど時間です。山本先生これで終わりにしたいと思います。坂口先生ありがとうございました。

坂口・新妻：ありがとうございました。